

南武蔵・相模における加曽利E式「古い部分」 ～その細別観点と表記について～

黒尾和久

1

筆者は、東京都八王子市宇津木台D地区の縄文中期の集落遺跡の報告（土井・渋谷・黒尾他 1989）以来、加曽利E式の時期細別は、とくに胴部の文様要素の変遷に着目して、その細別表記にはアラビア数字をあててきた。

その細別観点と表記は、東京多摩地区をフィールドにした縄文中期土器群の文様要素の変遷に着目した「時間軸の設定と考え方」（黒尾 1995 a：第 10 図）として公表し、「多摩丘陵・武蔵野台地を中心とした縄文時代中期の時期設定」（所謂「新地平編年」：縄文集落研究グループ 1995）においても「加曽利E式期」（10～13 期：黒尾 1995 b）を担当して示した。その後も研究集会（2004・2016：第 11～13 図）や集落遺跡調査報告、自治体史編さんの機会を捉えて「新地平編年・加曽利E式期」の再検討を続けてきた。

2

今回「加曽利貝塚E地点・B地点発掘 100 周年記念」として行われるシンポジウム「加曽利E式土器の再検討」に参加する幸運を得て、「南武蔵・相模における加曽利E式「古い部分」というテーマで話題を提供することになった。南武蔵でも西部の多摩地域を中心に縄文中期の集落遺跡の調査報告経験を積んできた筆者が、加曽利E式命名の地、下総で行われるシンポジウムに参加するにあたり、皆様との共通理解を得たいと望んでいることがある。

筆者の胴部文様要素に着目した加曽利E式の細別観点は、1924（大正 13）年の加曽利貝塚E地点の発掘以降、確かに内容に不完全なところはあったが唯一無二、しかし他方で入手が困難なこともあり、その情報が後学に正しく伝わらなかった『日本先史土器図譜』（山内 1940→1967：以下『図譜』）における山内清男の見方をベースにしていること。そして細別表記にアラビア数字を使用するのも、山内の呼称法（山内清男 1969→1974）に拠っていること。この二点である。

タイトルの「加曽利E式の「古い部分」という用語も、『図譜』の引用であり、「古い部分」は「細別のうち最も古い部分」（加曽利E 1 式）と、それに続く「真の加曽利E地点の土器の大多数及び下総上本郷E地点の土器」（加曽利E 2 式）に区分されるのである（第 1 表）。

文様要素の変遷に着目した加曽利E式の細別（アラビア数字編年）は、1970 年代後半以降に武蔵・相模地域の調査成果を基礎に定着した文様帯の消長に着目したローマ数字編年（新藤 1975・1976、谷井 1974・1978・2001 など）、そしてローマ数字編年をアラビア数字に読み換えた「書き換え編年」（能登 1975、戸田 1976・1977、鈴木 1981 など）とは細別観点が異なるものである。

1980 年に大学に入学、初めて考古学のフィールド調査に接した筆者は、武蔵・相模地域の調査資料を根拠にした文様帯の消長に着目した加曽利E式の細分研究（新藤編年：1976、東京・埼玉編年：安孫子他 1980、神奈川編年：鈴木 1981）の恩恵を受け、大いに学んだ一人であったが、1980 年代後半から多摩地域において縄文中期集落遺跡の調査報告に携わる過程で、個別集落の景観や居住形態に関する研究を実証

的に推進するには、文様要素の変遷に着目した土器編年が有意であることに気づいた。しかし、独自の時間軸を考案するのだとしても、細別型式の表記の問題も含めて、加曽利E式の先行研究との整合性をいかにとるかに悩んだ。加曽利E式の研究の歩みを点検する過程で、当時の研究シーンにおいてすでに伏流化していた感のあった『図譜』の記述とその先見性に出会い、細別表記の課題も一気に解決した。

八王子市宇津木台D地区（土井・渋江・黒尾 1989）、調布市原山遺跡第1地点（渋江・黒尾 1993）の縄文中期集落遺跡の調査報告を踏まえて、全点ドット、遺構内のみならず遺構間での遺物接合を導入した個別集落研究の進展を支えるためには、なぜ文様要素に着目した土器編年が必要なのかという問題意識を示しながら、その変化に着目した中期土器編年を提示し、『図譜』のプライオリティーを踏まえて、とくに加曽利E式の文様帯編年（ローマ数字編年、書き変え編年）との違いを明らかにする学史的な整理を行った。それが黒尾 1995 a 論文の「文様要素からみた加曽利E式の細別と呼称法」であった。

当然、文様要素編年（アラビア数字）と文様帯編年（ローマ数字編年・書き変え編年）の両者には細別観点の差異に由来した細別区分線のくい違いが生じることになるが、その対応関係については「編年対照表」を示して整理することにした。

第1表 加曽利E式編年対照表（黒尾1995 a から一部改変して転載）

黒尾 (1995)	新地平 (1995)	山内 (1940) 『日本先史土器図譜』	山内 (1969)	山内 (1979)	新藤 (1975) (1976)	谷井 (1974)	谷井 (1978)	谷井 (2001)	能登 (1975)	戸田 (1976) (1977)	鈴木 (1981)	安孫子 他 (1980)
E1	1a 1b 1c	10a 10b 10c	最も古い部分 古い部分	E1	隆線をつける	E I a E I b [古]	E I 前 E I 中		E I 前 E I 後	E1 E2	E1 E2	I II
E2	2a 2b 2c	11a 11b 11c		E2	沈線を加える (標本83)	E I b [新] [+]	E I 後 E I 後 E I 後 E I 後	E I 後 E I 後 E I 後 E I 後	E I 前 E I 中 E I 後	E2 E3古 E3新	E2 E3 E4古 E4新	III IV V
E3	3a 3b 3c	12a 12b 12c		E3	磨消文 縄文の手法	E II E II E II E II	E II 前 E II 後 E II 後 E II 後	E II 前 E II 後 E II 後 E II 後	E I 前 E I 中 E I 後	E3 E4古 E4新	E3 E4 E4 E4	VI VII
E4	4	13a・b	最も新しい部分	E4		E III E IV			E4 E4	E4 E4	E4 E4	

この「編年対照表」を見て気づいてほしいことがある。それは武蔵・下総・常陸の土器が紹介されている『図譜』を除けば、1970年代後半以降の加曽利E式研究のほぼすべてが武蔵・相模地域の発掘調査成果に拠っているという事実である。

加曽利E式の分布域は、細別時期ごとに明らかにすべき検討課題であるが、全般的に関東一円に及んでいるという理解は大方の支持を得られるであろう。そして、加曽利E式の4細別の中で、最も個体に地域差が現れるのが「最も古い部分」(加曽利E 1式)になるという推断も許容されるに違いない。武蔵には武蔵、下総には下総という具合に、加曽利E 1式土器群の具体的な様相を把握しなければならない。筆者の関心に引きつけるならば、今回のシンポジウムの成否の鍵を握るポイントの一つは、加曽利E式命名の地である下総（そして上総・安房）における加曽利E式の「古い部分」の編年研究成果が広く共有できるか否かにある。その成果をもとに南武蔵・相模との編年対比に繋げたいと希望しているのである。

翻ってみれば、南武蔵・相模の加曽利E式の編年も、「古い部分」に関していえば、地域における個性に着目して組み立ててきたと再認識しなければならない。そのみで関東一円に分布する加曽利E式のすべてを説明できない限界を知るべきであろう。加曽利E式の「古い部分」において、文様帯編年（ローマ数字編年・書き変え編年）が着目したのが頸部無文帯の消長であった。しかし、頸部無文帯の存在自体が、加曽利E式の「古い部分」の武蔵・相模におけるローカルな様相の現れであり、関東一円におよぶ加曽利E式において、頸部無文帯を時期設定のメルクマールにできる地域は狭く限られている。

この急所は、1980年の研究集会で、すでに安孫子昭二が、成立期の加曽利E式（「最も古い段階」）の系統整理に関して発言しており参考になる。「関東東部から北関東にかけて密に分布する「クランク状文」の口縁部モチーフをもつ系統と、「武蔵野台地側に分布する」「横S字状文」の口縁部モチーフをもつ系統との差異の説明に具体的に示されており、前者は「地文が縄文で」「頸部の無文帯をもたない」、胴部に「沈線からなる懸垂」文をもつ土器であるのに対して、後者は地文に「撚糸を縦に転が」し、「頸部に無文帯をもつ方が多」く、胴部に「文様が施されること自体非常に稀」な土器だと説明していた（安孫子発言・神奈川考古同人会1981）。

加曽利E式の「最も古い部分」にある地域差について、そして頸部無文帯の有無に着目する編年が通用しない地域があることを示す、じつに的確な説明であったが、この発言の典拠と推察されるのが、ほかならぬ『図譜』であることも、ここで改めて指摘しておきたいのである。

3

それでは、文様要素からみた加曽利E式の細別という観点で、『図譜』における山内清男の「加曽利E式」の解説（山内1940→1967）を確認してみよう。

山内は、加曽利E式の「古い部分」のうち「最も古い部分」（加曽利E 1式）とそれに続く「真の加曽利E地点の土器の大多数及び下総上本郷E地点の土器」（加曽利E 2式）に細別しているのだが、「細別のうち最も古い部分」（加曽利E 1式）については、「口縁部に突起把手が多く、口頸部の隆線文様がこれに関連して発達して居る（80～82参照＝筆者の第1～3図）。体部の文様帯には縄紋のみのものがあるが、隆線の文様あるもの、沈線の文様あるものもある」と説明した。

つぎに「最も古い部分」に続く「真の加曽利E地点の土器の大多数及び下総上本郷E地点の土器」（加曽利E 2式）は、「口縁部に突起殆ど無く、体部の文様は沈線のみであり、縄紋も斜行するのみで、縦行するもの（例えば81の如きもの＝筆者の第2図）を含んで居ない」と解説した。

加曽利E式の「古い部分」について検討する今回の筆者の役割からははずれるが、「加曽利E式の後半」である「新しい部分」（加曽利E 3・4式）に関して付言しておく、「体部の文様帯のうちに縄紋の抹消が一般化して来る」と定義されていることが重要であるだろう。胴部の文様要素に磨消縄紋が認められることで「新しい部分」（加曽利E 3式）が成立し、さらに「最も新しい部分」（加曽利E 4式）へと続く。

山内は『図譜』の解説で「加曽利E式の細別は未だ完全の域に達していない」と記していたし、『図譜』にも加曽利E式の4細別の標本がバランス良く示されていたわけでもない。『図譜』に示されていたのは、「最も古い部分」（加曽利E 1式）と「新しい部分」（加曽利E 3式）の土器群であり、そして別系統に分離されるべき「連弧文土器」であった。山内は『図譜』において、連弧文土器を「加曽利E式の新しい部分に属することは疑いない」と断じたが、その後の研究の進展で、連弧文土器の編年的位置も、現在では

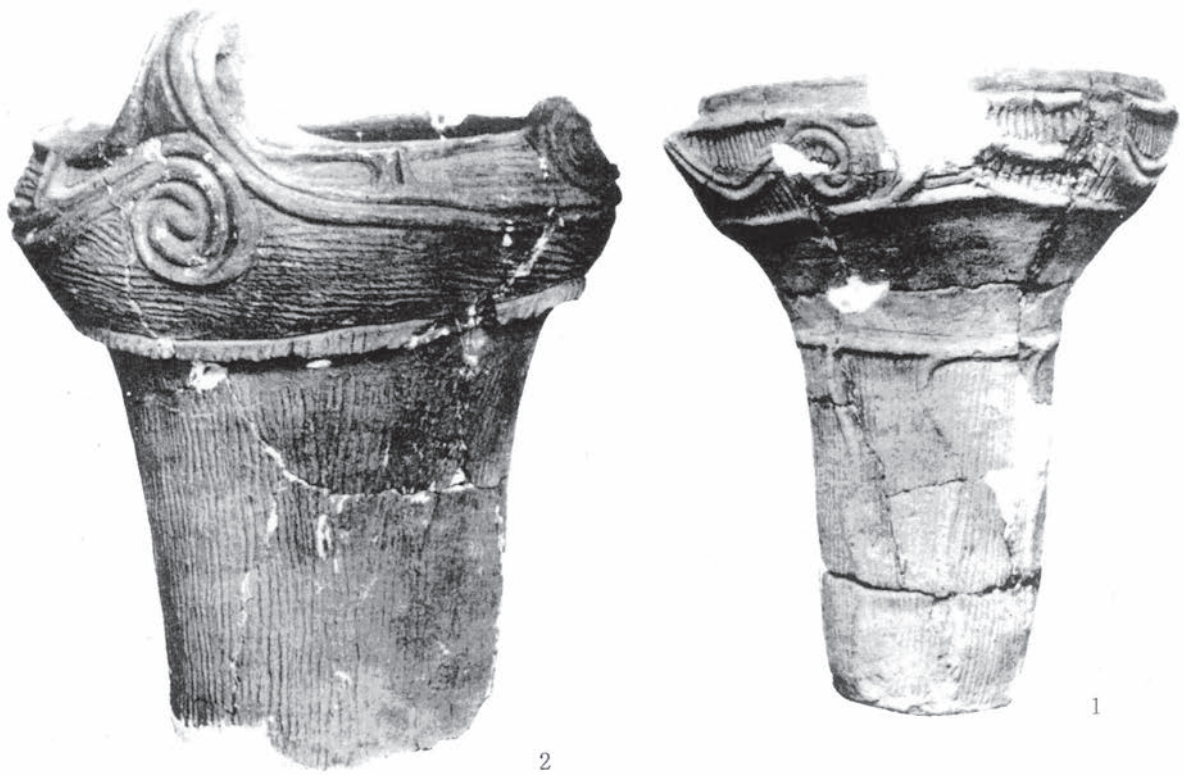
「古い部分」(加曽利E 2 b・c 式: 新地平編年11 b・c 期)を中心に、「新しい部分」(加曽利E 3 a・b 式: 新地平編年12 a・b 期)にまたがること明らかにされている。ここは修正されるべきだろう。

つぎに『図譜』80～83(第1～4図)に示された「最も古い部分」(加曽利E 1 式)の標本について見ていこう。山内が武蔵・下総・常陸という地域差を強く意識していることは間違いない。そこが要点である。南武蔵で調査を行ってきた筆者は、初めて『図譜』に接した時に、下総・常陸の加曽利E 1 式と例示された標本を相当の違和感をもって見たわけだが、胴部文様に着目すると、武蔵の「最も古い部分」の土器(第2図、第4図2)には、馴染みのある「縦行する縄紋」(撚糸文)の土器および胴部に「隆線」が懸垂する土器があるのに対して、下総・常陸には、「縦行する縄紋」と縄文地文の土器および「沈線」「隆線」が懸垂する土器までが示されている(第1・3図、第4図1)。武蔵には見慣れた頸部無文帯の土器(第2図1)があるが、常陸・下総にはない。武蔵と下総・常陸の土器には、先に紹介した安孫子による加曽利E 式成立期の二系統の整理によく合致する違いが見いだせるのである。山内の「最も古い部分」の胴部文様要素の説明に「縄紋のみのもの」「隆線の文様あるもの」「沈線の文様あるもの」と三つがそろったのは、東西関東(常陸・下総・武蔵)の土器の特徴があわせて説明されていたからであった。

そして『図譜』での具体的な例示はなかったが、「真の加曽利E 地点の土器の大多数及び下総上本郷E 地点の土器」(加曽利E 2 式)は、「体部の文様は沈線のみであり、縄紋も斜行するのみで、縦行するもの(例えば81の如きもの=筆者の第2図)を含んで居ない」と解説された。『図譜』に示されてこそいないが、「真の加曽利E 地点の土器の大多数及び下総上本郷E 地点の土器」(加曽利E 2 式)とは、「最も古い部分」に認めた東西関東の胴部文様要素の地域差が解消していく過程として理解できる。「体部の文様は沈線のみ」となり、地文は「斜行する」「縄紋」の土器として加曽利E 2 式は統一されていく。そして、加曽利E 式の「新しい部分」(加曽利E 3 式)が、磨消縄文という胴部の文様要素の成立で画されるのであった。



第1図 『図譜』80(常陸)



第2図 『図譜』81（武蔵）加曾利E 1 式



第3図 『図譜』82（下総）加曾利E 1 式



第4図 『図譜』83（1は下総、2は武蔵）加曽利E 1式

『図譜』の「最も古い部分」（加曽利E 1式）の解説から読み取るべきは、武蔵における加曽利E 1式の胴部の文様要素が、「縦行する縄紋」（撚糸文）と「隆線の文様」に絞られることに尽きよう。この二者が、武蔵・相模における「最も古い部分」（加曽利E 1式）の胴部文様要素のローカルなあり方をよく示しており、それに気づいたときの静かな喜びは忘れられない。

『図譜』から武蔵における「最も古い部分」の体部文様の地域性について学び、宇津木台D地区の報告以来、胴部の文様要素の変遷に着目した「撚糸地文のみ・撚糸ないし縄文地文+隆起帯」→「縄文地文+沈線」→「縄文地文+磨消」という細別序列が確定し（黒尾1995a：第10図）、それに「加曽利E 1式」→「E 2式」→「E 3式」というアラビア数字の表記をあてた（山内1969、第1表）。縄文中期を通しての「新地平編年」においては、「10期」→「11期」→「12期」と表記することになった（黒尾1995b・2004・2016：第11・12図）。なお「最も新しい部分」の「加曽利E 4式」は「13期」となる。

ちなみに『図譜』81-1（第2図）は、加曽利E 1 a式（新地平編年10 a期）、『図譜』81-2（第2図）は、加曽利E 1 b式（新地平編年10 b期）に比定される。そして南武蔵では「縦行する縄紋」である撚糸文地文は、斜行する縄文地文に置き換わり、「斜行する縄文」に「隆線」が添付される「縄文地文+隆起帯」の加曽利E 1 c式（新地平編年10 c期）が「最も古い部分」の最終段階となる。

その後、胴部の文様要素は「斜行する縄文+沈線」を有する加曽利E 2式へと変遷し、その古い段階には南武蔵・相模では頸部無文帯が残る。連弧文土器が成立する前段階の加曽利E 2 a式（新地平編年11 a期）の典型として小金井市中山谷遺跡第23号住居跡出土土器（第5図）をあげておこう。



第5図 中山谷第23号住出土の加曽利E2式



第6図 標本83『日本先史土器の縄紋』加曽利E2式

また頸部無文帯を失った加曽利E2bないしc式(新地平編年11b・c期)として、『日本先史土器の縄紋』(山内1979)に、標本83として示された加曽利E2式をあえてあげる(第6図)。

標本83の胴部の懸垂文は、縄文地文に、平行する3本の単沈線と蛇行する平行沈線とを交互に垂下させた文様で、沈線の垂下の後に、意識的に沈線間の地文を磨消した様子はいくつか見られ、沈線間に地文がつぶれつつも残っていることから、この懸垂文の文様要素は沈線であり、筆者が標本83を加曽利E2式とする根拠もそこにある。

しかし山内は、『日本先史土器の縄紋』(山内1979)の解説において標本83を「沈線間の縄紋を磨消す」「加曽利E新式」として紹介していた。筆者は、この個体の胴部にみられる文様要素を、加曽利E式の「古い部分」と「新しい部分」を分かつメルクマールである磨消縄文とするのは不適当とし、したがって加曽利E式の「新しい部分」(加曽利E3式)には認定しない立場にある。

なぜならば、標本83にみられるような平行する単沈線の垂下にともない沈線間の地文がつぶれてしまう懸垂文は、頸部無文帯を有する加曽利E式の「古い部分」にも、ごく普通に認められるからである。小金井市中山谷遺跡出土の加曽利E2式土器(第5図)の3本1組の懸垂文も、沈線間の地文は磨消されるようにつぶれている。この文様要素をも磨消縄文と認定しなければならないのであろうか。

さらには、沈線が竹管の腹によるものである場合、その垂下によって地文がつぶれてしまう文様要素は、加曽利E式の「最も古い部分」の胴部文様にも一般的に認められる。『図譜』80-2(第1図)もその一例になる。

要するに標本83(第6図)の胴部の文様要素を磨消縄文と認めると、「体部の文様帯のうちに縄紋の抹消が一般化して来る」と山内がいう加曽利E式の「新しい部分」は、「古い部分」方向に無秩序にさかのぼり、「最も古い部分」までを消滅させかねない。

この矛盾を解消するための唯一の方法は、磨消縄文の定義を厳密に規定することである。それについても『日本先史土器の縄文』における山内自身の「磨消縄文と言われる紋様」の解説に拠るべきであろう。引用すると「その手法は劃線を境として縄紋ある部分と、無い部分を作ったもので劃線内縄紋と言った方が誤解が少い。はじめ縄紋が加えられ、線が加えられ、その間の縄紋が消される。これが磨消縄文の本態であり、線の紋様が加えられた後、一部分に縄紋が加えられるものもある」と、きわめて簡潔、明快に規定されていた（山内1979）。

したがって、「磨消縄文の本態」とは、「はじめ縄紋が加えられ、線が加えられ、その間の縄紋が消される」ものなのであり、その読点による区切りが明確に、地文→沈線による劃線→劃線内の地文の磨消、という三段階の施文工程を指し示している。

標本83（第6図）は、「地に縄紋」があり、それに「沈線を加える」までは明確だが、三番目の地文を磨消す工程がない。すなわち山内自身による「磨消縄文の本態」の定義を満足していない。この件に関しては、大家山内も間違えることがあったと言うしかないだろう。

加曽利E式の「古い部分」と「新しい部分」（加曽利E2式と加曽利E3式）を区分する根拠は、磨消縄文の出現、あるいは一般化とすることに尽きる。その区分を客観的なものにするために「磨消縄文の本態」は、地文を施す→沈線による画線→画線間の地文の磨消、という施文工程を有する文様要素として固く定義されるべきであろう。

『図譜』に例示された加曽利E3式はすべて武蔵で出土した土器（第7～9図）で占められているが、すべて「はじめ縄紋が加えられ、線が加えられ、その間の縄紋が消される」という「磨消縄文の本態」に則る胴部文様が施されている。



第7図 『図譜』85（武蔵）

加曽利E3式



第8図 『図譜』86（武蔵）加曽利E3式

第9図 『図譜』87（武蔵）加曽利E3式

4

山内は『図譜』「加曽利E式」の解説冒頭において、「加曽利E式は関東地方縄文土器中期の後半に当る土器型式群であって、大正十三年下総国千葉郡都村加曽利貝塚E地点発掘の土器を標準として指摘されたものである。しかし、この貝塚の発掘については、土器型式の細別及び年代的編年に最も理解に乏しかった八幡一郎氏による概法が現れただけで、詳細は公表されないで終わった。加曽利E式なる名称も何等典拠とすべき文献がなく、隠語の如く用いられて今日に至った訳である。その間に意味は多少拡大されて真に加曽利E地点発見の土器の範囲外のものまでに及び、更に若干の細別型式に分かたれる様になって居る」と述べている。加曽利E式研究の混乱の出発点がここに記されている。

加曽利貝塚E地点の発掘から100年の節目を迎えた今、『図譜』に書かれた84年前の研究状況、その後の混乱をどのくらい乗り越えられたであろうか。南武蔵における加曽利E式の編年、そして細別観点と表記の問題には一定の整理がついたと筆者は考えたいが、加曽利E式の分布範囲を、山内がとらえていた常陸・下総へと視野を広げたときに新たな課題が立ち上がる。『大成』・『大観』・『事典』・『総覧』を冠した企画本をみても、関東一円に分布する加曽利E式の概説には未だ成功していない。

向後の加曽利E式研究の進展を見据えて、「古い部分」に着目した場合、筆者の立場から言わせてもらえば、やはりこのシンポジウムで下総の加曽利E 1式についての確かな知見を得たい。さらに希望をいうならば、断続的に発掘調査が行われてきた加曽利貝塚出土の加曽利E式の土器についてより具体的に知りたい。そして100年前に行われ、加曽利E 2式の標識として山内が暗示した「真の加曽利E地点の土器の大多数」に類する土器群を実見し、武蔵・相模の加曽利E 2式との異同も確認をしてみたい。

国の特別史跡・加曽利貝塚には、膨大な縄文時代の生活痕跡が埋蔵していることは疑いない。新たな調査にも当然期待をしたいが、過去100年の調査資料を再検討して、その結果を社会に還元することを100年の計としてほしい。加曽利貝塚出土の加曽利E式土器の編年を一層確たるものにして、関東一円に広がる加曽利E式の横の繋がりを考える際の基礎資料として編集提示されることを待望しよう。

参考・引用文献

- 安孫子 昭二・秋山 道生・中西 充1980「東京・埼玉における縄文中期後半土器の編年試案」『シンポジウム 縄文時代中期後半の諸問題 神奈川考古』第10号 神奈川考古同人会
- 安孫子 昭二・神奈川考古同人会1981「シンポジウム 縄文時代中期後半の諸問題—とくに加曽利E式と曾利式との関係について—」『神奈川考古』第11号 神奈川考古同人会
- 黒尾 和久1995 a「縄文中期集落遺跡の基礎的検討（I）」『論集 宇津木台』第1集 宇津木台地区考古学研究会
- 黒尾 和久1995 b「加曽利E式期」『シンポジウム 縄文中期集落研究の新地平』縄文中期集落研究グループ・宇津木台地区考古学研究会
- 黒尾 和久2004「加曽利E式期」『シンポジウム 縄文集落研究の新地平3—勝坂から曾利へ—』縄文集落研究グループ・セツルメント研究会
- 黒尾 和久2016「基調報告：加曽利E式」『シンポジウム 縄文研究の地平2016—新地平編年の再構築—』縄文研究の地平グループ・セツルメント研究会
- 渋谷 芳浩・黒尾 和久1993『はらやま』調布市原山遺跡調査会
- 縄文中期集落研究グループ・宇津木台地区考古学研究会1995「多摩丘陵・武蔵野台地を中心とした縄文時代中期の時期設定」

『シンポジウム 縄文中期集落研究の新地平』

新藤 康夫1975「縄文時代中期の土器とその内容」『下寺田・要石遺跡』八王子市下寺田遺跡調査会

新藤 康夫1976「加曾利E式土器細分の再検討」『考古学雑誌』第62巻第3号

鈴木 保彦1981「勝坂式土器 加曾利E式土器」『縄文土器大成』2 中期 講談社

谷井 彪1974「花影遺跡の調査」『南大塚・中組・上組・鶴ヶ丘・花影』埼玉県遺跡発掘調査報告書 第3集

谷井 彪1978「加曾利EⅡ式土器の覚書」『埼玉県立博物館紀要』5

谷井 彪2001「加曾利E式土器における口縁部文様と形態の系譜」『埼玉の考古学』新人物往来社

土井 義夫・渋江 芳浩・黒尾 和久他1989『宇津木台遺跡群XⅢ』八王子市宇津木台地区遺跡調査会

戸田 哲也1976『千葉県山武郡芝山町小池麻生遺跡』山武考古学研究会

戸田 哲也1977『釣鐘池北遺跡』釣鐘池遺跡調査団

能登 健1975「縄文文化解明における地域研究のあり方」『信濃』第27巻第4号 信濃史学会

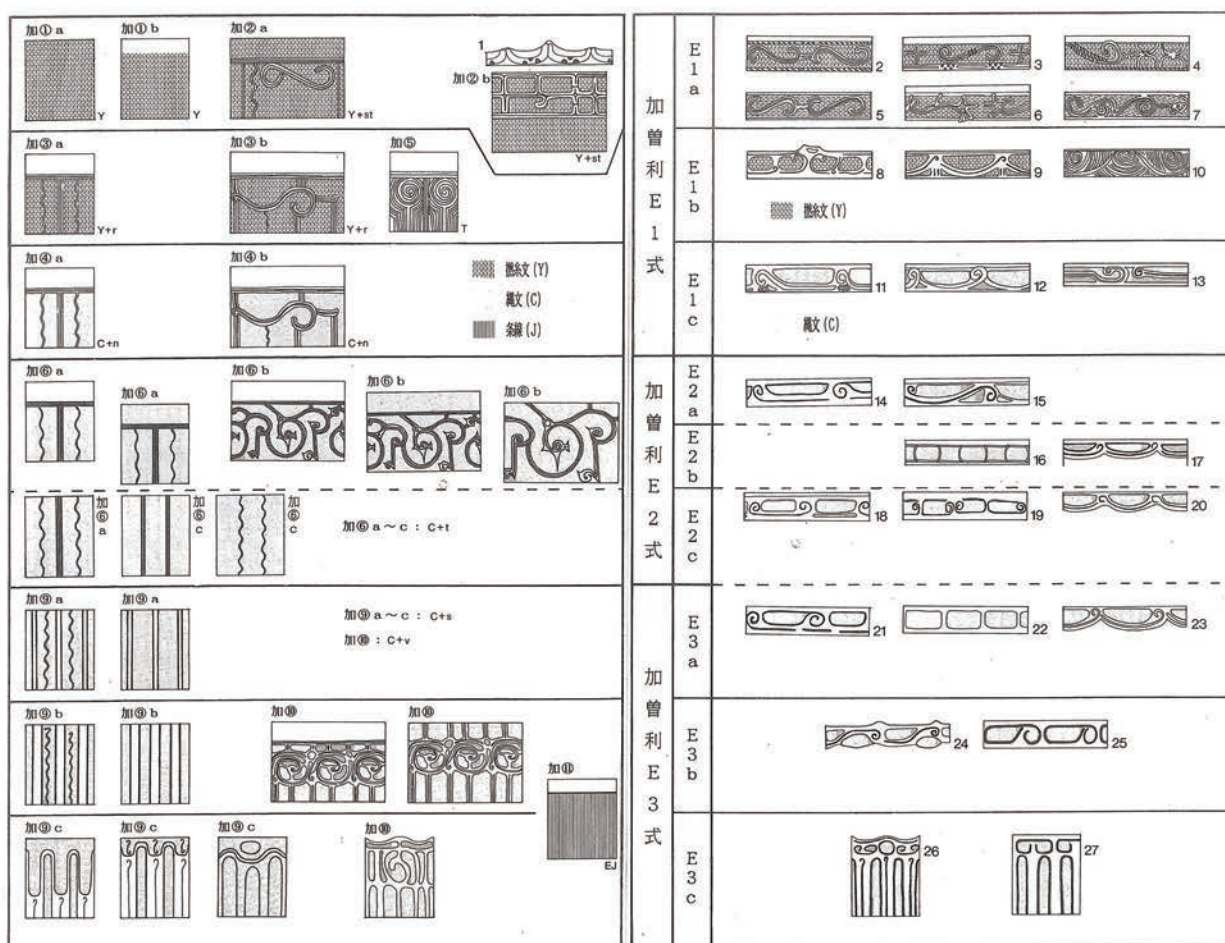
山内 清男1940「加曾利E式」『日本先史土器図譜』第Ⅸ輯

山内 清男1967「加曾利E式」『山内清男・先史考古学論文集・第六～十冊』再版・合冊

山内 清男1969「縄紋草創期の諸問題」『ミュージアム』第224号

山内 清男1974「縄紋草創期の諸問題」『日本考古学選集21 山内清男集』

山内 清男1979『日本先史土器の縄紋』先史考古学会



第10図 加曾利E式の胴部・口縁部の文様要素の変遷（黒尾1995 a）

多摩丘陵・武蔵野台地を中心とした縄文時代中期の時期設定「新地平編年」

(黒尾2016を転載：参考文献は省略)

「加曽利E式期」(図11～13)(註1)(2016註1・2)

胴部の文様要素の変遷に着目し設定した黒尾の加曽利E式の4細別案(黒尾1995)に対応させて、東京西部地域(多摩丘陵・武蔵野台地)の土器群(加曽利E系・曾利系・連弧文系)を、10期～13期に時期細分した(註2)。既成編年案との対照は、第1表を参照されたい(註3)(2016註3)。

10期(加曽利E 1式期)：加曽利E式の胴部の文様要素は、大きく、撚糸→撚糸+隆起帯→縄文+隆起帯と変遷する(註4)。黒尾1995の中期後葉1a～1c期。

10a期 胴部の撚糸地文が卓越し、勝坂式の文様要素を消失した口縁部に横S字モチーフを配した「武蔵野台地型」の加曽利E式土器が成立する(註5)(2016註4)。胴部に竹管の腹による地文の磨消し効果を有する文様要素をもつ個体も出現する。頸部を無文化する土器も確実に存在。曾利I(古～新)式がみられる。

10b期 胴部に撚糸地文と隆起帯による懸垂文を組み合わせた土器の盛行期。大型把手をもつキャリパー形土器がみられる。頸部の無文区画が普遍化する時期。沈線地文による同心円モチーフをもつ土器の盛行期。曾利I(新)式の併行期。曾利系土器の把手も大形化が顕著(註6)。

10c期 撚糸地文の土器は減少し、縄文地文と隆起帯による懸垂文を組み合わせた土器が多くなる。口縁部は平縁に統一されていく。頸部区画の無文化は継続。多摩丘陵・武蔵野台地では、曾利II(古)式に併行する加曽利E式と文様要素が類似する縄文地文に粘土紐を貼付する土器が伴う(註7)。

11期(加曽利E 2式期)：加曽利E式の胴部に沈線の懸垂文が施される時期である。東京西部の土器群の地文様相は、縄文→縄文・撚糸・条線→条線・沈線と推移する。後半が、縄文地文の加曽利E系の衰退、連弧文系・曾利系土器群の台頭期となる。黒尾1995の中期後葉2a～2c期。

11a期 太く深い沈線による口縁部渦巻文土器の成立。地文の主体は単節縄文で、加曽利E式が主体的な存在であり、それに曾利II(古)式併行の土器群が伴う。口縁部は平縁が主体で、頸部区画の無文化も継続する(2016註5)。

11b期 東京西部地域での連弧文土器の出現期。口縁部渦巻文土器に加え、渦巻きつなぎ弧状・杵状の口縁部区画を有する土器がみられるようになり、縄文地文とともに撚糸文・条線地文土器も目立つようになる。これらの土器群の生成は、山梨県域での曾利縄文系土器・斜行沈線文土器の成立期に併行しよう。また頸部区画の無文化指向は、弛緩してやがて衰退するが、器形やタイプによって喪失時期にはズレが認められる(2016註6)。胴部のくびれがきつい器形、あるいは波状口縁の土器なども出現。

11c期 連弧文土器の盛行期にあたる。縄文地文の口縁部渦巻文の加曽利E式の減少期であり(2016註7)、山梨県域の曾利III(古)式に併行する地文が条線・沈線の、いわゆる加曽利E式(連弧文土器を含む)・曾利式の「折衷土器」が盛行する。地文が定期的に条線から沈線へと傾斜することや、連弧文土器の文様モチーフの崩れなどを捉えて、11c1期と11c2期に小細別が可能である。

12期(加曽利E 3式期)：加曽利E式の胴部文様要素に磨消縄文が成立する時期。黒尾1995の中期後葉3a～3c期。11期までが加曽利E式の「古い部分」、12期からが「新しい部分」である(山内1940)。

12a期 胴部に磨消縄文を有する土器の出現期であるが、多摩丘陵・武蔵野台地では、曾利III(新)式に併行する沈線地文の「折衷土器」の盛行が持続する。ただし連弧文土器は急激に衰退する。

12b期 東京西部地域における口縁部渦巻文の加曽利E式の復権期であり、それに伴う「胴部隆起帯文土器」もみられるようになる。武蔵野台地では、一部、ローカルナイズされた「斜行・重弧文土器」がみられるほかは曾利系土器群の出土例は激減する。西多摩・西相模地域が、地文に沈線・条線を用いる山梨県域の曾利III(新)～IV式土器群が出土する境界地域となる模様。12b期の後半期には、波状口縁土器、蕨手状の懸垂文などがみられるようになる。後半期が曾利IV式に併行するであろう。

12c期 加曽利E式の口縁部文様帯の消失期で、口縁部区画のある土器とない土器は、前半期では確実に伴出する（2016註8）。
蕨手文などの副文様が盛行し、懸垂する沈線は太い。曽利V（古）式に併行する。

13期（加曽利E 4式期）：口縁部文様帯、胴部の蕨手文などの副文様も消失する時期。従前の「加曽利E IV式」に該当する時期である。
黒尾1995の中期後葉4期（2016註9）。

13a期 加曽利E 4式の成立期であり、口唇部を単沈線によって幅狭い無文帯と縄文部に区画しつつ、蕨手状の懸垂文などの副文様が消失した対向「U」字区画の土器が出現する時期。沈線には太いものが残存する。

13b期 加曽利E 4期の展開期であり、胴部には、微隆起線文が文様要素として一般化し、なおかつ細い単沈線による対向「V」字区画文の土器が盛行する。

14・15期（後期初頭・称名寺I式期）：本シンポジウムでは検討対象外の時期であるが、石井寛の称名寺式の古・中段階（石井1992）を、それぞれ14・15期として表記し、加曽利E式系統の後期初頭段階での継続を念頭において、時期設定の大纲を掲載しておく。

14a期 石井寛による称名寺式7期区分の「第1段階」であり、西南関東での称名寺式の成立期（石井1992）。加曽利E系統の土器群（現在「加曽利E IV式に続くもの」あるいは「加曽利E V式」と仮称されている）は、14a期以降も、称名寺式と融合しつつ継続していく（2016註10）。

14b・c期 石井による称名寺式7期区分の「第2・3段階」の併行期（編年表実測図は「第3段階」）である

15a・b期 石井による称名寺式7期区分の「第4・5段階」の併行期（編年表実測図は「第5段階」）。

（註：2004年）

（註1）今回のシンポジウム主題（縄文集落研究グループ・セツルメント研究会2004年）のひとつが、西関東・中部の勝坂・曽利式移行期の土器の検討であることは言うまでもない。共同研究者による事前の様々な議論があつて、その成果が、9b～10b期を対象とした編年表「東京を中心にした勝坂式終末から加曽利E式初頭にかけての編年表」として提出されている。そこでの検討を受けて、主として東京西部地域を検討対象とした本編年表も、10期（加曽利E 1式）に関して修正をくわえた新版（新地平編年2004）を作成した。ただし、11期（加曽利E 2式）以降については、現状で大きな改正の必要性を感じていないので、旧版（新地平編年1995）のままとする。具体的な変更点として、加曽利E式期の編年表から9c期を削除している→（註2）参照。この9c期の削除や土器実測図の差し替えに伴って、一部の土器No.に欠番（1. 2. 4. 5. 7. 10. 26）が生じたので了承されたい。また新たに実測図を挿入した土器No.は、191～197が該当する。さらに加曽利E 1式・曽利I式土器との時間的併行関係について再検討の結果、旧版（新地平編年1995）において9c期とした土器No. ー 3. 6. 8. 9. 11を10a期に、10a期とした20を10b期へと移行した。

（註2）旧版（新地平編年1995）では、撚糸文地文の「武蔵野台地型」の加曽利E式の成立を9c期と仮設して、山梨県域の曽利I（古）式に併行する土器群の伴出をも想定していた。しかしながら今回の再検討の結果、新版では「武蔵野台地型」の加曽利E式の成立をもって10a期と画することに改めた。そして東京西部地域で、現状で曽利I式の伴出が確実に認められるのも、10a期以降である。また東京都においては、曽利I式が出土する地域は案外に限られており、秋川中・上流域（あきる野市・西多摩郡檜原村）、および八王子市域がその中心となる。なお意外なことであつたが、多摩川上流域（奥多摩地域）は、むしろ霞川・入間川流域に属すると考えた方がよいようで、曽利I式の出土は稀少、加曽利E 1式のあり方にも、東京西部よりも埼玉西部と類似点が多いようである→（註4）参照。

（註3）旧版（新地平編年1995）以降の研究として、「新地平編年」とはまったく異なつて、いわば対極ともいふべき一括土器認定の資料観（いうなれば「共出」至上主義：「共出」概念については「五領ヶ台式期」参考文献の今村2000（註24）を参照）から編まれた加曽利E式期の編年研究として、谷井彪論文（谷井2001）を対照表に追加しておく。また今回のシンポジウムに関連して、谷井論文とはほぼ同様の資料観から検討された入間郡毛呂町『まます遺跡』報告における考察「加曽利E I式成立期における土器群

の再検討」(金子2001)も興味深い。覆土一括出土遺物の同時期性認定のあり方についての議論の機は熟している。

(註4) 野川流域における小金井市中山谷遺跡(中山1987:第VI期・第22住→第24住→第23住、調布市原山遺跡(黒尾1993)、多摩丘陵における八王子市宇津木台D地区(黒尾1989)、滑坂遺跡(佐々木・小林1988)における出土事例、そして八王子市下寺田遺跡での新藤康夫氏の検討(新藤1975)と編年研究(新藤1976)を紐解くまでもなく、東京西部地域では、加曽利E式の胴部文様要素として、隆起帯貼付(10b・c期)→沈線施文(11期)の変遷、なおかつ地文の撚糸文(L撚)(10a・b)→単節斜縄文(RL)(10c~11b)の変遷は非常にスムーズである(黒尾1995)。ところが、10b期に最も多くなる胴部文様要素であるL撚・胴部隆起帯が貼付される新相の加曽利E1式土器(場合によってはE2式に降る可能性もあるが要検討)の多摩川上流域における分布が確認されている。たとえば、あきる野市二宮遺跡Ⅲ区3号住出土土器(新版編年表—土器No.196)などが典型例である。このような個体の存在は、文様要素による細別時期分類に不利な状況を招来するけれども、二宮事例などは、文様要素が古い様相を留めている一方で、器形(プロポーション)は、10b期よりも新しく、10c期(ないし11a期)の様相と言って良い。具体的根拠を示せる段階にないが、奥多摩・入間地域の加曽利E1式には、胴部文様要素に隆起帯貼附が長く残存するという印象があり、二宮事例も、多摩川流域というよりも、霞川・入間川流域との交渉の結果というように直観する。この点の具体的追求も今後の課題としたい。

(註5) 東京西部地域における「武蔵野台地型」の加曽利E式土器の成立は、①撚糸(L撚)地文の全面施文(頸部は素文になるものもある)、②隆起帯によって口縁部文様帯の上下区画をする、③口縁部には横位のL撚地文の施文、④文様要素として、2本平行粘土紐を使用、⑤屈折底の痕跡化(キャリパー器形の成立)などが指摘できるだろう。これらの要件を満たす個体を、加曽利E式(10a期)の成立と認定する。これらの要件のすべてを満たさない原初的・過渡の様相の個体が、9c期に存在し、旧版編年表の府中市清水が丘遺跡(土器No. -1)、調布市原山遺跡(土器No. -2)事例などが該当する。それらは、新版編年表「勝坂式期」の9c期にのみ図示し、「加曽利E式期」からは削除した。

(註6) 旧版(新地平編年1995)では、「曾利系土器の出土は、一旦減少傾向となる模様」と述べた。新版では、あきる野市松海道(新版編年表土器No. -192~195)やあきる野市前原(黒尾・宇佐美2010)などの事例増加を踏まえて、この文言を削除する。

(註7) 東京西部地域において、「曾利Ⅱ式」と通称されてきた縄文地文土器群は、この段階から出現し、10c期を画するメルクマールとなる。ただし、山梨県域の曾利Ⅱ式土器群(曾利縄文系・渦巻つなぎ弧文土器など)との時間的併行関係についてはなお吟味が必要である(黒尾1995、黒尾1997、黒尾・額額2001)。ところで連弧文土器の出現を、この「曾利Ⅱ式」の出現期(10c期)まで遡らせようという意見は依然として根強いけれども、加曽利E2式の成立期である11a期が、連弧文土器の出現前に位置することは明らかである。この点、繰り返し強調しておきたい→(註4) 文献・黒尾1995を参照されたい。

(註:2016年)

(2016註1) 新地平編年1995・2004の加曽利E式期は、黒尾1995論文をベースに、集落(「環状集落跡」)研究を支える時間軸として設定したものである。そのため編年表に示した土器は、黒尾が1980年代後半から90年代前半に調査報告に携わった八王子市宇津木台D地区、調布市原山第1地点の報告成果を中心に、八王子市滑坂遺跡、同欄田第Ⅲ遺跡、立川市向郷遺跡、府中市清水が丘遺跡等の多摩地域の調査事例をから選択して、不足について他の遺跡の出土資料で補うという方法を採用した。したがって、新地平編年の加曽利E式期の全面改訂には、その後、調査報告の提出された多摩ニュータウン地域や八王子市小比企向原遺跡などの調査成果はもちろんのこと、自ら携わったあきる野市前原・大上・北伊奈遺跡、国立市緑川東遺跡での新知見なども取り込んで行うべきであろうが、まずは現行の新地平編年2004版の加曽利E式期の問題点や検討課題が確認されるべきだと考えた。そのような意図もあって、今回のシンポジウムでは、加曽利E式期に関しては、櫛原功一、徳留彰紀、大網信良、小澤政彦の4氏からコメントを頂戴する重厚な布陣をとることにした。櫛原氏には曾利式土器の編年研究からみた多摩地域の曾利式の特徴や新地平編年との対比に関して、徳留氏には武蔵野台地東北部の調査事例を基に加曽利E式成立に関して(9b期~10a期)、大網氏には連弧文土器の系統と編年に関して(11a期~12c期)、小澤氏には加曽利E3式から称名寺1式(12c~15期)の系統と編年に関して事実報告・

問題提起をしていただくことになっている。これに加曽利E 1 式からE 2 式の移行期の問題（2016註5 参照）についてのコメントが加われば重要な検討課題はほぼでさう感がある。今回のシンポジウムを足がかりに、遠からず新地平編年の加曽利E 式期の全面改訂版を公表する機会を得たいと思う。

（2016註2）加曽利E 1 a ～E 3 b 式（10 a 期～12 b 期）に関しては、宇津木台D 地区、原山第1 地点の報告における住居の先後関係（重複・近接）や土器の出土状況の検討を踏まえて時期設定を行っている。細かな問題は指摘されようが、致命的な間違いは今もないと考えている。黒尾としては、私たちが提示する土器編年とは、あくまでも集落（「環状集落跡」）研究を支える時間軸として有用なものとするべきだと考えていた。そのため宇津木台D 地区、原山第1 地点ともに加曽利E 3 b 式（12 b 期）で居住地としての土地利用を終焉していたこともあって、調査資料からのフィードバックが行えない、いわゆる「加曽利E Ⅲ式」土器（12 c 期）の出現以降の編年表提示には必ずしも積極的ではなかった。しかし新地平編年1995の構想過程で、小林謙一・中山真治と議論をして、将来を見据えて時間軸の大枠は示しておく必要性が確認されて、それでは中期末～後期初頭の端境期の称名寺1 式（15期）までは射程にいられておこうということで落ち着いた。そんなわけで14期・15期についても簡便な編年表を用意したという経緯がある。したがって新地平編年2004年の改訂版を出す場合には、12期～15期についてより充実させる必要があるわけだが、2010年のあきる野市前原・大上・北伊奈の調査報告ではあまり意識することはなかったが、2014年の国立市緑川東遺跡の調査報告を経て、ようやく具体的な取り組みが必要であることを実感できるようになった。もちろん、「環状集落跡」（重層的な居住の場）がなくなる12 c 期以降であっても、集落研究に有意な時間軸として新地平編年を整備する方針に変わることはない。

（2016註3）加曽利E 式研究の「編年対照表」には学史的検討を踏まえた長山明弘の労作がある（長山2014）。黒尾1995と新地平編年1995も長山氏の対照表に掲載されているが、基本的に同じものであるはず両者において、加曽利E 3・4 式の細分線がそろわないように表示されている（表2）。長山の表示は、後述した（2016註8）、柳澤清一の批判に重なるものであるだろう。同じ人間の提示する編年において細分線が揃わない齟齬は、結局のところ具体的に提示した土器に難があるからに違いない。それが加曽利E 3・4 式で指摘されるのは、前述（2016註2）もしたように、12 c 期以降は、そもそもの目途の対象外の時期にあって、黒尾の土器型式・系統理解に問題があり、編年表に採用した土器に必ずしも好適でない事例があったからであろう。遺憾としたい。しかしながら、それでも大局的にみて黒尾1995に示した時間軸の大枠、新地平編年の時期呼称を変更する必要はないと考えている。要は中味を充実させていく方向でのバージョンアップを行えばよい。土器編年表に採用する土器の加除など修正すべき点は本シンポジウムでも指摘されるであろうし、12期以降については、大網報告・小澤報告から重要な示唆が得られるはずである。

（2016註4）「武蔵野台地型」加曽利E 式の成立に関しては、「勝坂から曽利へ」というテーマ設定で2004年シンポジウムにおいて議論した。この端境期・移行期の土器群を理解する難しさについては、「9 c 期」問題と評して、その後も私たちは常に意識してきたところであり、今でも多摩地域における加曽利E 式の唐突な成立の印象を完全にぬぐえないでいる。今回は2004年シンポにおける「東京編年表①～③」を踏まえ「勝坂から加曽利E へ」という観点で、武蔵野台地東北部の様相について、加曽利E 式の成立（9 c・10 a 期）に関する徳留報告がある。埼玉県志木市・和光市・新座市などは東京都清瀬市なども含めて「勝坂から加曽利E へ」を考えるには好適なフィールドであると私考してきたところであり、徳留報告に期待したい。

（2016註5）多摩地域では頸部無文帯を有する加曽利E 2 式で占められる時期で、繰り返しになるが、連弧文土器は出現していない。黒尾も連弧文土器の成立時期の問題については注目したことがあるが（黒尾1995）、その話題に関して大網報告を注視したい。なお多摩地域における胴部文様要素の変遷に着目した加曽利E 1 式（10期）と加曽利E 2 式（11期）の区分は、隆起帯→沈線への変化がメルクマールとなり、その変遷については、宇津木台D 地区、原山第1 地点、滑坂・小比企向原、多摩ニュータウン No. 72、向郷、中山谷等、数多くの集落遺跡の調査報告において十分な裏付けがとれる。ところが例外的に多摩川上流域・霞川流域・狭山丘陵などにおいては、隆起帯の添付が加曽利E 2 式段階まで継続する傾向が看取される。この点については2004年シンポジウムでも「住居一括出土土器群の同時期性について考える」と題してあきる野市二宮Ⅲ区3 号住居の土器出土状況に関して検討した（発表要旨

193～203ページ)。その際は胴部に隆起帯を懸垂する個体と沈線を懸垂する土器の「共出」を、製作時期の異なるE 1 式(10 c 期)とE 2 式(11 a・b 期)の混在ととらえた。したがって土器の廃棄された時期は、E 2 式(11 b 期)と考えればよいと説明し、一方でE 2 式まで古い文様要素が残る可能性も留保した。その後、劇的に事例が増えるというわけではないが、多摩北西部では胴部に隆起帯を添付する加曽利E 2 式も分布すると理解することによって、連弧文土器の成立時期の検討もスムーズに行えると考えられるようになった。新地平編年2004のあきる野市二宮(196)、武蔵村山市(43・48)は、10 c 期ではなく、11 a 期ないし11 b 期のどちらかに編年する方向での修正検討を進めたいと思うが、この点については連弧文土器の成立問題に関連させて大網報告から示唆を得たい。また共に出土している曽利Ⅱ式の編年的位置も参考になろう。櫛原報告にも注視したい。

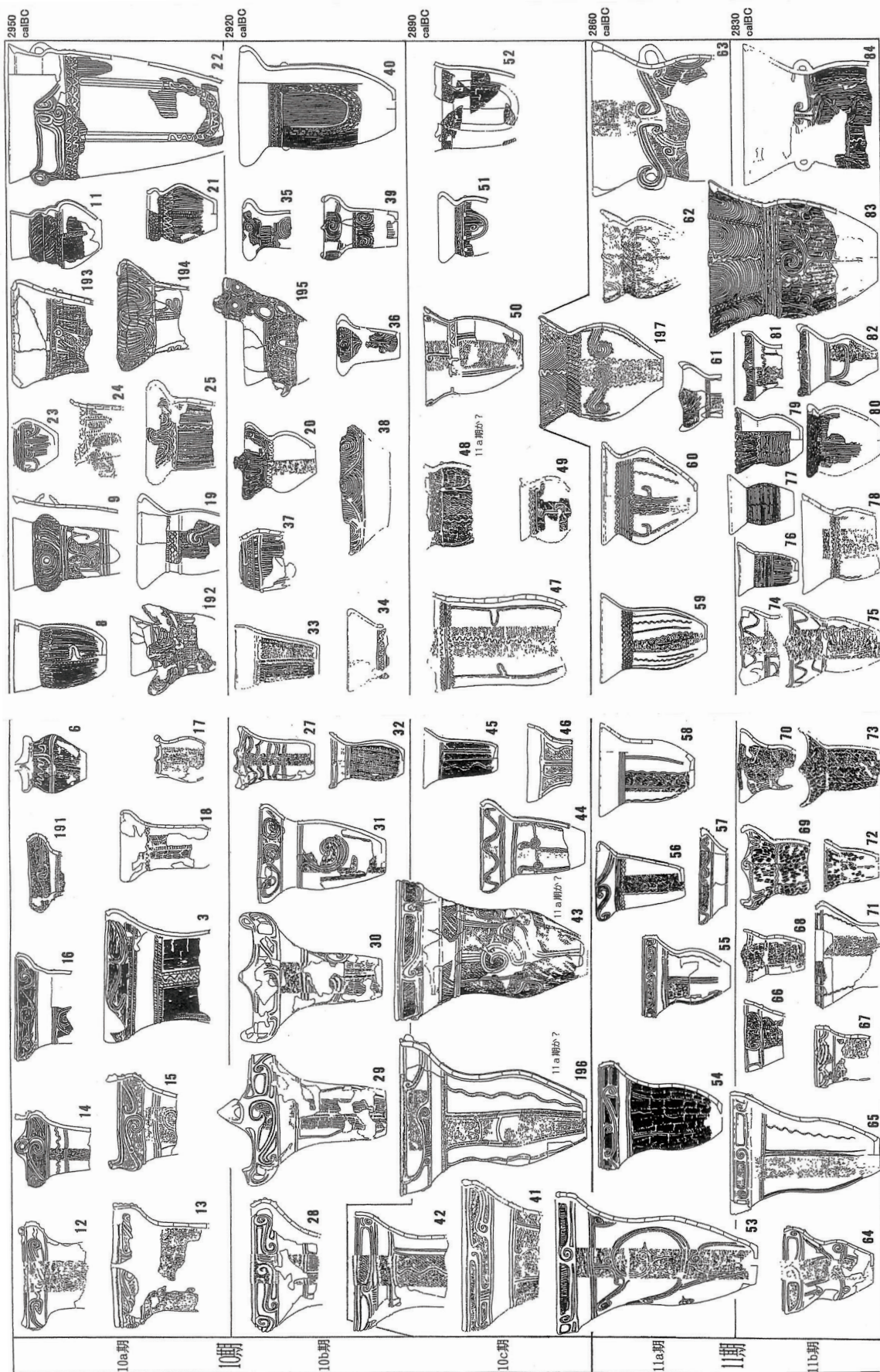
(2016註6) 無文部を形成した頸部区画から上部に地文がはみだした土器、従来の無文部にまで縄文地文が施された土器を11 b 期の加曽利E 2 式と識別できるが、11 b 期には、どうも出現期の連弧文土器を伴わない前半と伴う後半という2小期(11b1期と11b2期)に細分できる可能性が指摘できる(黒尾・宇佐美2010)。こちらはあくまでも土器の出土状況から見出される小期区分ということになる。

(2016註7) 山内清男の『日本先史土器の縄文』で図示されている「標本83」の胴部文様要素は沈線である。磨消縄文ではない。したがって「標本83」は加曽利E 2 式と分類すべきである(黒尾1995)。なお「標本83」は11 c 期に比定される。また『日本先史土器図譜』に示されている連弧文土器も、胴部に磨消縄文のみられる加曽利E 3 式に伴う個体ではない。それらも11 c 期の所産である。連弧文土器が、加曽利E 式の「古い部分」と「新しい部分」にまたがる編年的位置を有することは周知のこととなったが、連弧文土器の編年と新地平編年との対比に関しては大網報告に注視したい。

(2016註8) 口縁部区画のない加曽利E 3 式土器の代表格が、いわゆる横位連携弧線文土器である(加納1989a・b、加納1994)。加納実の研究を参照するならば、ローマ数字系の加曽利E 式編年は、一般的に口縁部文様帯を有する土器群に横位連携弧線文土器が伴うようになる段階をもって加曽利E Ⅲ式(古)が成立すると理解するようである(加納1989a・b、加納1994)。新地平編年では、12 c 期がローマ数字系の加曽利E Ⅲ式古段階に併行するとひとまず理解している。おそらく加曽利E Ⅲ式の成立は12 b 期の新しい段階に遡ると思われるが、12 b 期の小細分については、連弧文土器の変遷とその終焉(横位連携弧線文系への推移?)の問題に関連して大網報告で言及されるであろう。

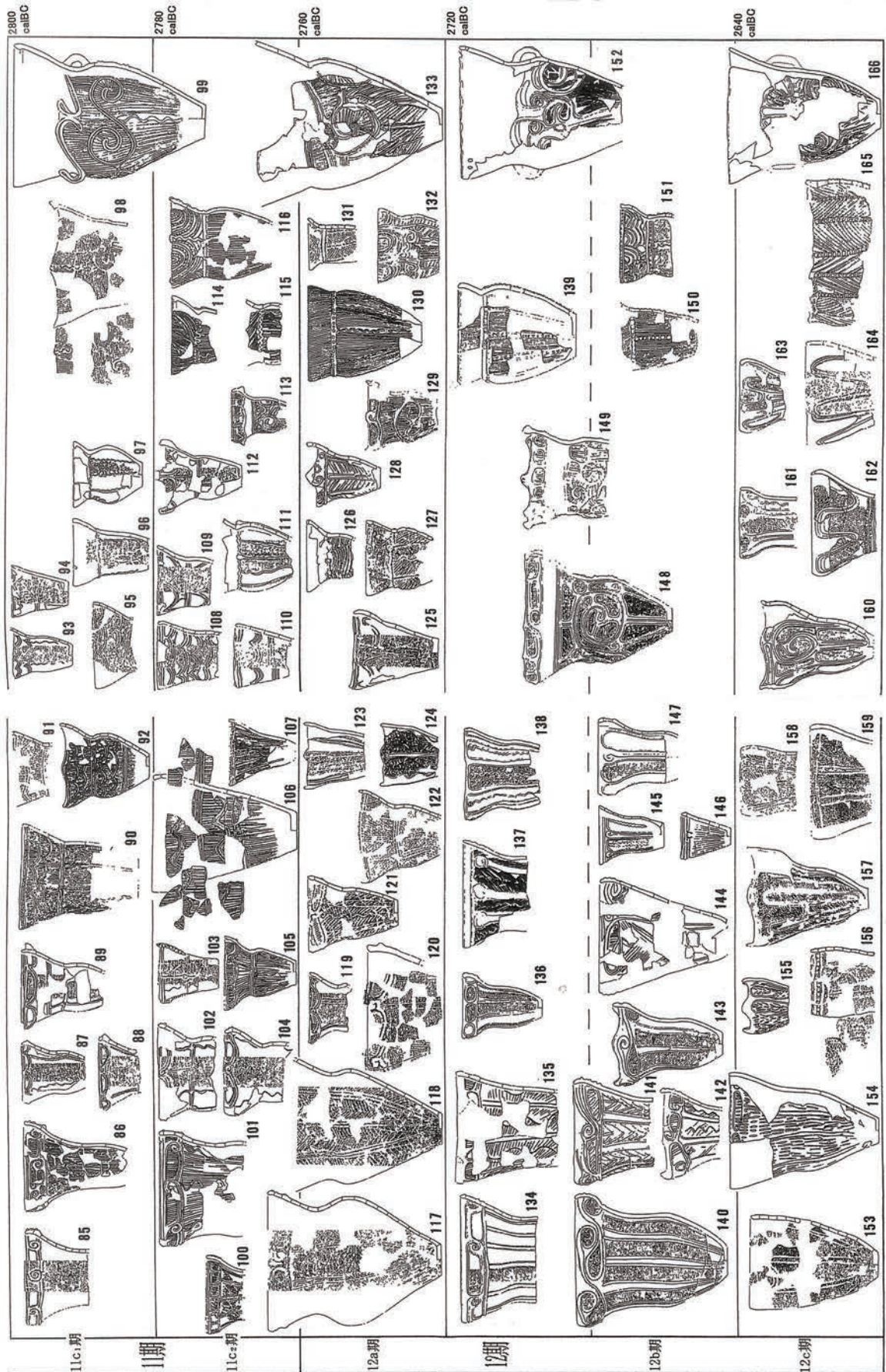
(2016註9) 13 a 期は加納実の加曽利E Ⅲ式新(加納1994)、および柳澤清一の加曽利E 3-4式(柳澤2006)に、13 b 期は、加納実の加曽利E Ⅳ式(加納1994)、柳澤清一の加曽利E 4 式古段階(柳澤2006)に対比が可能か、今後検討を深めてゆきたい。なお新地平編年13・14期については、掲出した土器についての柳澤清一の批判的検討がある(柳澤2006)。柳澤によれば、13 a 期の167・168は「加曽利E 3 式新」、169・171は「加曽利E 3-4式」(170については言及がない「E 3-4式」か)、14 a 期の174は「加曽利E 3 式新終末」、175・176は「加曽利E 3-4式」、172・173・177～181は「加曽利E 4 式」と言う。13期～15期については、小澤報告によって編年表の充実にむけての足場が構築されるであろう。

(2016註10) 14 a 期の標識資料としては、横浜市稲ヶ原A遺跡B 4 住出土資料が著名であるが、黒尾らも近年、国立市緑川東遺跡第4次調査において敷石遺構S V 1 覆土および土坑S B 2-D 1 覆土出土の13 a 期の土器群を報告した(黒尾・小澤2014)。この成果は小澤報告でも言及されるはずである。なおS B 2-D 1 出土の称名寺式第一段階(中津式)の土器に付着した炭化物のAMS測定年代は従前からのデータに照らすと中期末葉に該当する分析結果がでており、留意される。ちなみに柳澤清一は、石井の称名寺第1・2段階の土器を、関西系中期末葉土器として理解し、石井の「第3段階」以降をもって称名寺1式の成立とする(柳澤2006)。

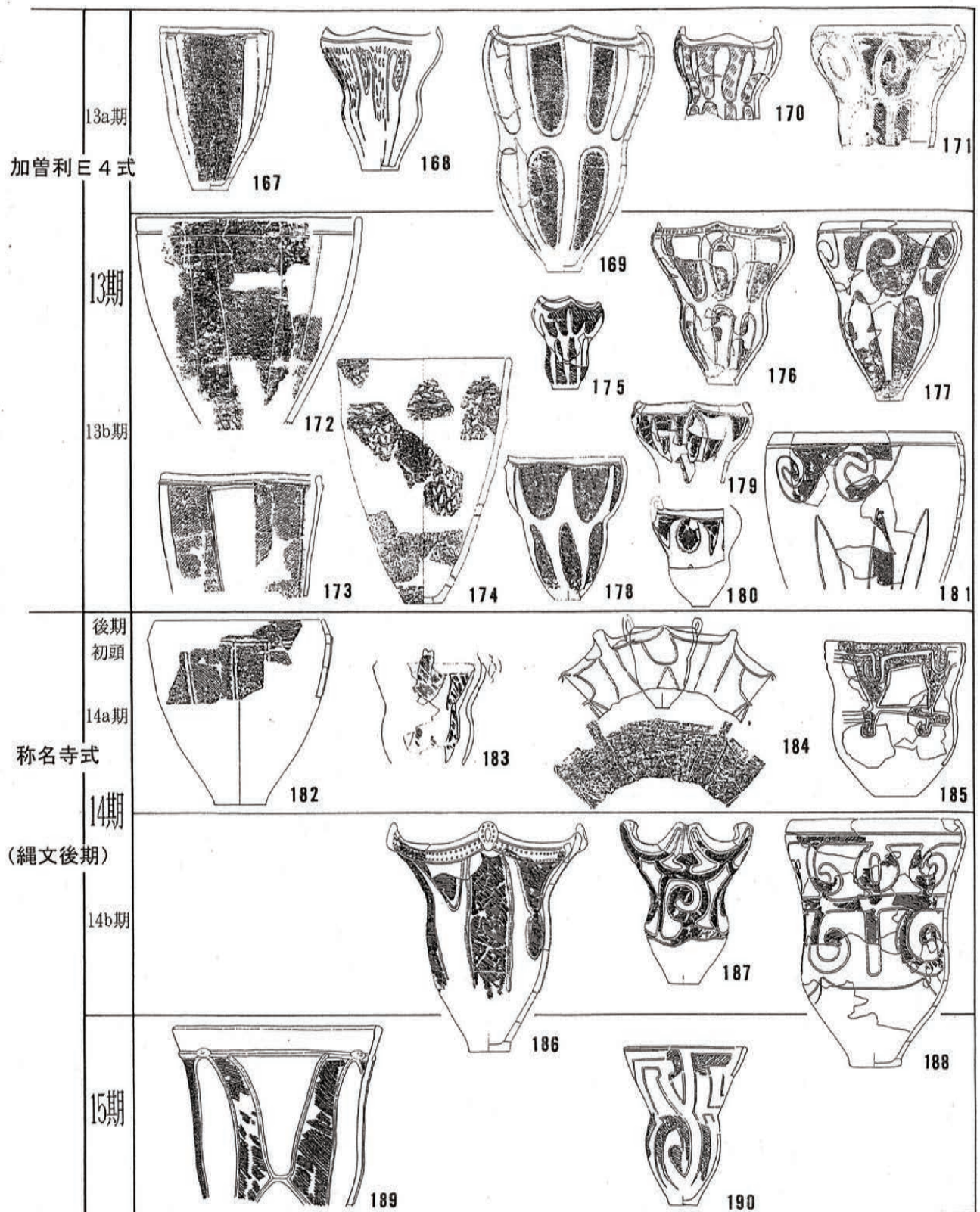


図版出典
八王子市神木台D地区 (12,18,23,25,28 ~ 30,34,37,42,47,49,53,67,70,74,75,78,85,87 ~ 89,92,94,96,98,101 ~ 104,106,109,112,115,119,120,125,126,128,129,135,142,144
八王子市南坂 (8,9,11,16,20 ~ 22,31,35,36,39,40,51,52,55 ~ 57,59,61,71,76,81,82,97) 八王子市下町田 (65,79,80,99,134,137,145,147) 八王子市下町田 (95,96) あきる野市
留原 (3) 立川市向原 (14,27,113,114,123,124,136,138,140,141,143,148,149,155,161,162,167,170,176,177) 府中市清水谷分丘 (19,77,100,105,107,172,174,175,188,190) 調布
市原山 (13,15,17,24,38,41,46,50,63,64,66,86,91,93,95,108,110,111,116 ~ 118,121,122,127,131,132,146,150,151,153,156,158 ~ 160,164,165) 調布市原山 (6,30,163,169)
調布市上和田 (18,11,86 ~ 189) 国立市谷原 (17,78) 三鷹市第五中学校 (130) 東久留米市自由学園 (32,33,139) 東久留米市新山 (157,173,179,180) 武蔵野市西谷山 (43,48)
小金井市中山谷 (45,54,55) 小金井市加賀 (182,184) 青梅市加賀 (185) 羽村市根上 (62,72) 羽村市平尾 (183) 稲城市平尾 No.9 (158) 稲城野原
市神木 (133,152,154,160) 神久井町神久井町川尻 (69,73,84) あきる野市加賀 (191 ~ 195) あきる野市二重 (196,197)

第11図 多摩丘陵・武蔵野台地を中心とした縄文時代中期の時期設定（加曾利E式期 その1）



第12図 多摩丘陵・武蔵野台地を中心とした縄文時代中期の時期設定（加曽利E式期 その2）



第13図 多摩丘陵・武蔵野台地を中心とした縄文時代中期～後期初頭の時期設定